慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シスモンディの思想過程について
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.3 (1938. 3) ,p.325(39)- 368(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19380301-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380301-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シスモンディの思想過程について

永田　清

一

私は曾て本誌第二十四卷第九號に於いて「正統派經濟學批判者としてのシスモンディ」を論じたことがある。この舊稿による結論は、彼の「經濟學新原理」Nouveaux principes d'économie politique, ou De la richesse dans ses rapports avec la population, 1819, 2me éd., 1827. に於いて彼れの根本思想が確立したといふのであつた。その「商業的富について」De la richesse commerciale, 1803. を著はした時には完全にアダム・スミスの使徒であつたシスモンディは、前記の「經濟學新原理」を著はすに及んで、自ら新原理と稱した如く、經濟學を「社會經濟」(Economie sociale) といふ全く新らしい基礎の上に建設したといふのであつた。この結論は別に事新しい考へではなく、一般研究者の等しく承認するところである。それどころか、シスモンディ自身がこの事實を自己の著書の中に書いてゐる。然し彼れの「商業的富について」及び處女作「トスカンに於ける農業略圖」Tableau de l'agriculture Toscane, 1801. を精讀してみると、以上の通俗な結論は相當重要な修正を必要とすることが明らかになつた。こゝに舊稿を改めて

再びシスモンディの思想過程を分析する所以である。

經濟學上に於けるシスモンディの主要著作は說くまでもなく「經濟學新原理」である。この書は一八一九年に初版が、一八二七年に再版が出版されてゐる。この初版と再版とは如何に異つてゐるか。シスモンディは此書の再版の序文に、「經濟學の中にはポレミークな部分があり、この部分は必然的に現代と關聯し、最近の事情によつて支持せられ、且つ斯る事情の變化發展に從つて變ずべきものである。だからこの種著作の新版は始ど必然的に新著作となるべきである」（再版、第一卷十七頁）と述べた。そして再版には新らしい章句が相當多く附加されてゐる。けれども理論の內容に於いては、初版と再版との間に左程の變化がない。たゞ「批判者としての態度を明示せる重要な經濟理論を一層詳細に論じた」（再版序文十八頁）ところの「生產・消費の均衡に關する開明」を卷末に添へ、「社會經濟」の理念をより感情的に强化したといふ程度である。從つて彼れの經濟理論を分析する場合には、一應この兩版を同一基底において好い。

尤も彼れは一八一八年に Edinburg Encyclopaedia に「經濟學」に關する一項を發表し、この項目で旣に近代の勞働關係及び自由競爭の弊害並に生產の過剩に關する經濟學體系を論述した。然しこの理論はそのまゝ「經濟學新原理」に於いて發展擴充された。從つて吾々は先づこの主要著作について彼れの理論を窺はねばならぬ。

シスモンディは「經濟學新原理」の初版序文の中で斯う述べてゐる。——

「私の觀察した事象のあるものは嘗て採用した諸原理と相容れないものゝやうに思はれた。此等の事象は私の理論の新たな展開によつて直ちに開明せられると思ふ。私の理論を推し進むるに從ひ、スミスの臆說に與へた重要性と確實性とを確認するに從ひ、それまで經濟學上に曖昧であつた總べての問題は、この新しい見地から考察されて明瞭となり、而して私の原理は曾て提出しようとも思はなかつた困難を解決してくれた」（註一）と。

斯くてシスモンディは正統學派によつて確固不動のものと看做された諸原理を再び疑惑の中に投じた。その簡潔なる故に、またその法則の明瞭な演繹の故に、人間精神の最も崇高な創造物のやうに思はれた科學の基礎を動搖せしめた。そして遂に彼れは正統學派の理論を危險な學理として排擊するに至つたのである。この點でローゼンベルグはシスモンディを以て經濟學思想史上における一つの轉向期を示すものとなし、「經濟學それ自體の疑惑を表明したことを以て、彼れの科學的功績」と考へてゐる（註二）。

註一　Sismondi, Nouveaux principes, 2me éd., Avertissement XX et XXI.

註二　ローゼンベルグ「經濟學史」（2）序文及び一二五頁

然らば彼れの言ふ「スミスの臆說に與へた修正」とは何か。

シスモンディによると、アダム・スミス及びその學徒は富を以て經濟學の主題としてゐる。彼れが可成り劇烈な口調を以て非難するのはこの點である。正統學派は抽象せられた富の性質、その增加または破壞の原因を問題とする。彼等は物のために人間を、手段のために目的を犧牲にする。だから彼等の說く理論は經濟學ではなくて Chrématistique であるといふ。斯くてシスモンディは正統學派に L'école chrématistique の異名を與へた（註一）。彼れを

以てみれば、「人間の物質的福利は、其が政府の仕事である限りに於いて經濟學の目的である」（註二）。即ち彼によると、經濟學は統治の學の一部門である。そして彼れは統治學を二分する。その一は本來の意味の政治學であり、その二は經濟學である。而して經濟學はすべての者に國民的繁榮の利益を保證すべきである。

物そのものは何等の價値をも持つてゐない。人間に役立つが故に富としてこの性質を具有する。富の理念は物と人間とを關聯せしめる場合にはじめて明白となる。然るに正統學派の理論は目的と手段とを混同し、物としての富の增加を研究對象としてゐる。斯くしてシスモンディは富の研究に幸福の研究を對比せしめる。人間の福利と關聯する他の社會現象より富を分離せんとするのは誤謬であり、その結果は福利そのものゝ上に不幸を齎らしたと考へる。彼れがリカアドオに與へた有名な言葉に、「何、然らば富が一切で、人間は絶對に何ものでもないのか」 Quoi donc? la richesse est tout, les hommes ne sont absolument rien? （註三）といふのがある。この言葉ほどシスモンディの根本思想を明瞭に現すものはない。

註一　Sismondi, Nouveaux principes, 2me éd., tome I, p. 17-18.

註二　Ibid, 1re éd., tome I, p. VIII.

註三　Ibid, 2me éd., p. 331 note.

また彼れは經濟學を以て財貨の公正なる分配を研究する科學であると考へる。富それ自體の增進が問題ではない。國民の幸福の增大こそ必要なのである。「經濟學は富者に對すると等しく、貧者に對しても亦、生活の安易、快味及び平靜に參加するを得せしむべき秩序を求めなければならぬ」（註一）。從つて經濟學は彼れにとつては厚生の理論（la theorie de la bienfaisance）であつて、「つまるところ人類の幸福を增進する結果を齎らさない總べての理論は全くこの學に屬さない」（註二）と考へてゐる。從つて彼れの言ふ經濟學は則ち「社會經濟學」（Economie sociale）に外ならない。かくて彼れは、倫理的政策を基本とした經濟學の建設に努力したのである。だからマルクスは「哲學の貧困」の中でシスモンディを反動家となし（註三）、また「共產黨宣言」において小ブルジョワ社會主義の巨頭と言ひ（註四）、レニンは小ブルジョワ的同情より出來上つてゐる經濟學的浪漫主義と稱した（註五）。

註一　Ibid, p. IX.

註二　Ibid, tome II, p. 248-9.

註三　K. Marx, Misère de la phylosophie, nouvelle éd. 1908, p. 92.

註四　Marx-Engels, Communist Manufesto, Kerr 版四六頁。

註五　レニン「浪漫派經濟學批判」邦譯八四頁。

斯くて吾々は彼れの經濟學が人道主義的感情に彩られてゐることを明らかにした。それがまた所謂「社會經濟學」の本質でもある。ところが若し問題がこの地點だけに止まるならば、シスモンディを以て注目すべき劃期的な學者だと言ふことは出來ない。特に彼れの經濟理論に注目すべき理由は、斯る經濟倫理學、社會政策論が經濟組織に對する理論的分析、マルクスの口吻を藉りれば、市民的生產に於ける矛盾の的確なる判斷（註一）を基礎とするところに在る。「シスモンディは資本家的生產が自己矛盾することを痛感してゐる。即ちそれの諸形態、それの生產諸關係

は、一方に於いて生産力及び富の自由なる發展を刺戟する。ところが他方に於いてこの諸關係が條件づけられたものであるといふことを、また生産力が發展すればするほど使用價値と交換價値との、商品と貨幣との、販賣と購買との、生産と消費との、資本と勞働との、その他等々の矛盾が益々大規模に現れるといふことを痛感してゐる。特に彼れは、一方に於いては生産力の自由なる發展、及び同時に商品から成り立ち販賣されねばならぬ富の增加と、他方においては資本家的生産力の基礎として、生産者の大衆を彼等に必要な生活資料に局限せねばならぬこと、この根本的矛盾を感じてゐる。それ故に恐慌は彼れに於いてはリカアドオに於けるやうに偶然事ではなくて、益々大規模に、そして一定の時期に於いて現はれる內在的矛盾の本質的發露なのである。そこで彼れは國家の力によつて生産關係に適應せしめるやうに生産力を羈束すべきであるか、それとも生産力に適應せしめるやうに生産關係を羈束すべきであるかに絶えず迷つてゐる。その際彼れは屢々過去に逃避する、過去が一切の鎭靜劑となるのである。而して分配關係が外見上の生産關係にすぎぬことを理解しないで、資本との關係に於ける收入が、或は生産との關係に於ける分配が別樣に規律されることによつて、その矛盾が押へらるれば尙ほ更結構だと考へる。彼れはブルジョワ的生産の矛盾を的確に判斷してはゐるが、それを理解してはゐない。從つてまたその崩壞の過程を理解しないのである。併し乍ら彼れの見解の根抵に横つてゐるものは、事實に於いて資本的生産の胎內で發展するところの富の創造の物質的及び社會的條件たる生産力に、その富を占有する新たな形態が照應せざるを得ないといふ豫感である。即ちブルジョワ的諸形態は富がその中で何時でも對立的な存在のみを獲得し、またどこでゞも同時にその對立物として現れるところの一時的な、そして矛盾に充ちたものであるにすぎぬといふ豫感である。富はいつでも窮乏を前提とし、また窮乏を發展せしめることによつてのみ自ら發展するところのものである」（註二）。

註一　餘剩價値學說史、マ・エ全集一一卷七〇頁。

註二　同　六九―七〇頁。

二

以上のやうに考察して來ると、シスモンディの理論を分析する場合にはその「社會經濟學」を基礎づけてゐるところの生産關係の矛盾を示す經濟理論を明らかにする必要が起つて來る。また事實上この點がシスモンディ研究者の最も力を注ぐところであり、理論的にみても、正統學派に對する根本的な批判の部分である。そしてこの批判は彼れの恐慌論に於いて最も的確に現れ、從つてそのためにこの問題で極めて活潑なポレミークが行はれた。然し今この問題に這入る前に、彼れの思想の最も特徵ある他の一面を明らかにしておかう。それは後年歷史學派と稱せられる一聯の學者達の先驅となるべき彼れの方法論である。確かにシスモンディは後の獨逸歷史學派の創始者等がその名を掲ぐることなきに拘らず、歷史的研究の開拓者として特筆せらるべきものである。この點についても彼れは正統學派に對する强烈な反對者であつた。

彼れは本來歷史家であつた。歷史上の勞作も數多い。而して今日比較文學の立場から彼れの論述が研究されるのもこの故である。彼れは實際社會の事情を觀察することを怠らず、この事象の觀察から出發する方法論上の立場は

自ら正統學派のそれと異つてゐた。

彼れは經濟學を以て最も嚴密な意味の經驗科學であるとなし、專ら事象の觀察から出發すべきことを說く。勿論正統學派と雖も經濟學が經驗科學であることを否定するのではなく、事實の觀察による基礎づけを說くことに變りはない。然しシスモンディは彼等の方法がこの方法に極めて不忠實だといふのである。彼等のみる事象とは甚だ單純な概括的事象であり、且つ既に一個の原理に歸せしめられてゐる事象である。斯くて正統學派の經濟學說は遂に思辨に陷つて現實から離反してゐる。

經濟現象は甚だ複雜なものであるから、經濟學程事實についての愼重な研究を必要とする學はない。從つて經濟學は先づ第一に觀察の科學であらねばならぬ。斯くて彼れは抽象性を廢棄して具體性を重視し、所謂歷史主義を以て理論の根抵とする。歷史主義を採用することは必然的に經濟理論の相對性を說くことになる。彼れは慥かに時間的・場所的制約性を經濟理論に對して認めてゐる。例へば彼れは大規模生產及び機械生產の害惡を說くが、それは斯る生產それ自體が惡いといふのではなくて、資本主義的經濟組織の下に於いては種々なる矛盾を惹き起す原因となるといふのである。

素々彼れが恐慌論を說くに至つたのも、この方法論的立場から出發したからである。恐慌を目のあたり見た彼れはこれを經濟組織の矛盾より生ずる必然的な現象だと斷じた。然し後に說くやうに正統學派特にセイは自己の抽象論を固執してシスモンディと反對の立場に立つた。シスモンディはこれを以て事實を蔽ふものとして極力抗爭したのである。

然しシスモンディの此歷史主義的方法論が常に一貫してゐるかといふと、この點については疑義がある。例へばアフタリオンによると、シスモンディはあらゆる歷史的概念の歸結を現はしてはゐない。のみならず斯る概念に絕えず忠實であつた譯ではない。例へば「新原理」に於いて、彼れは古典學派の抽象の無意識的記憶から完全に逃れてはゐない。乃ち彼れは「孤立人のための富の形成」から經濟學の研究を始める。孤島に於けるロビンソンの歷史は人類の歷史であると說き、また總べての人の富は各人の富の總和にすぎぬと考へてゐる。彼れは個別經濟と國民經濟とを同視し、また國民經濟と世界經濟とを混同する。かくて時と場所とに從ふ經濟現象の變化の概念、相對性の概念はシスモンディに於いては甚だ嚴密であつたとは言へない。だから彼れが英吉利學派に對して與へた批判から彼れ自らも亦逃れることが出來ないといふ（註一）。

註一　A. Aftalion, L'œuvre économique de Sismonde de Sismondi, p. 62-3.

然しそれにも拘らず彼れが一般的に歷史的方法論を主張したことに變りはない。たゞ經濟理論の基礎としてこの方法論を適用することが弱いといふのである。從つて問題は經濟理論の分析の仕方に移るのであつて、歷史的方法論の主張それ自體に間違ひはない。そしてこの主張は假令全般的に貫ぬかれてゐないとしても、彼れの理論の構成に非常な影響を與へたことは確かである。兎に角この方法論は一般の學史家によつて歷史學派の先驅と看做され、シスモンディの學說中の著しい特徵であり貢獻であるとされてゐる。

三

斯くて私はシスモンディが正統學派との論爭を惹き起した恐慌論を說いて、彼れの所謂「社會經濟」學の理論的基礎づけを明らかにしよう。この點は既に舊稿に於いて略々明瞭にされた。然し理解の筋道として一應この論構を示しておかなければならぬ。舊稿との重複も亦避け難いのである。

シスモンディによると、資本制生產方法は消費を顧みることなく無制限に擴張せられ、然もその消費は收入によつて限定せられる。かくて彼れは恐慌の原因を一方に於いて資本制生產とこれによつて條件づけられた收入の分配との間に存する不均衡にありとし、他方に於いてまた資本蓄積の過程の中にこの原因を認めた。

彼れは「經濟學新原理」の序文の中で斯う言つてゐる。

「現代のすべての經濟學者達が認めるところに從ふと、公の財產は私人の財產の集合體にすぎぬから、其は特殊な各人の財產に於けると同じ方法によつて、生成、增加、分配、破壞せられる。私人の財產の中で考察さるべき最も根本的な部分は所得であり、また消費・出費は所得に應じて統制されねばならぬ。さうでなければ資本の破壞となることを彼等は知悉してゐた。併し乍ら公の財產に於いて、一人の資本は他人の所得となるから、何が資本で何が所得であるかを決定するに困惑した。而して彼等はその計算から所得を全く除外することが最も簡單な方法だと考へた。セイ及びリカアドオは斯く本質的に決定すべき數量を無視して、消費は無制限な力であり、若しくは少くとも、其は所得によつて限定はせられるけれども、消費の限界は生產のそれに等しいと信ずるに至つた。彼等の示すところに從ふと、生產される富は常に消費者を見出すであらう。而して彼等は所得を有する消費者のみ考慮にいるべきであつたにも拘らず、生產者を激勵して今日文明世界の困窮を釀したところの市場に於ける斯る生產過剩を惹き起したのである」（註一）と。

註一　Sismondi, op. cit., 2me éd., Avertissement, xij-xiij.

シスモンディの斯る批判は言ふまでもなくセイの市場理論にむけられたものである。「生產せられたすべての富は常に消費者を見出す」といふのがこの市場理論の骨子であることは言ふまでもない。セイは一部の生產物が過剩に生產せられること、即ち部分的生產過剩は起り得るが、一般的または普遍的生產過剩は發生し得ないと說いてゐる。シスモンディはこの不可能論に反對する。而してこの反對は一面彼れの所得學說を基礎として說かれてゐる。

彼れは收入の範疇に注意を集注し、就中資本と所得とを明確に區別すべきことを主張する。「資本と所得との區別は社會に於いて本質的なものである」（註一）。それにも拘らず正統學派はこの區別を混同したゝめに、重大なる誤謬に陷つた。そして多くの有害なる學說がこの混同に立脚してゐた。一方シスモンディはこの區別が極めて困難なことを認めて、「其は經濟學上最も抽象的であつて、且つ最も困難な問題である」（註二）と述べてゐる。

註一　Sismondi, Nouveaux principes, 2me éd., tome I, p. 83.

註二　Ibid., p. 84.

にとつては資本となり、而して同一對象物が手から手へ移るに從つて次々に異つた名稱を受けることを吾々は知つてゐる。然かも他方消費された財より離れるその價値は、これをある者は支出し、他の者は交換し、又ある者に於いては其は對象物そのものと共に消滅し、他の者に於いて再び更新され、而して循環と共に繼續する所の形而上學的數量の如きものである」。

彼れは所得を、或は富の所有の結果として定義し、或は消費のために豫定された富の一部として定義してゐる。そして、所得には三種あると主張する。即ち彼れによれば、一切の富は勞働の生産物である。而して「所得は斯る富の一部分であるから、この共通なる泉源より生ずる筈である。併し乍ら、通常三種の所得が認められる。即ち地代、利潤、勞銀はこれであつて、各々土地、蓄積せられたる資本、勞働の三源泉より生ずる」。又謂ふ。――「一國にとつては、新なる所得は節約によつて與へられ、新なる希望の生産を成立せしめ得る各個の固定資本及び流動資本より生ずる」。「又所得は流動資本が需要に關聯して生ぜしむる新なる勞働からも生ずる」と。この點に於いては、シスモンディは正統學派の所得理論から一歩も出て居ない。だが彼れは更に附け加へて云ふ。「充分なる用途あり、確實なる消費の望みあるが如き新生産物を生ぜしむる新流通資本は、他人を害することなくして社會に二種の新所得を與へる。一は富者に對する所得であつて、それは流通資本の增加を通じて與へられる。他は貧者に對する所得であつて、それは勞働を通じて與へられる。而して兩者何れの所得も新なる消費と換へられ、等しく賣手の販路を增大する。然しながら、單に所有者を變へるに過ぎない所得は決して新なる所得ではない。競爭者の損失によつて自己の所得の增加を來したる商人、自己の勞働者の賃銀減少によつて所得の增加を來したる製造業者の如きは毫も一國の所得に附け加へる所はない」と。以上の點から、彼れが價値實現の問題――是は正しく再生産についての基本的問題である――を提起して居ることを知ることが出來る。これこそ正統學派の理論から前進が行はれた場合の例であつて、一般的恐慌肯定への第一歩をなすものである。

次に資本に就いてはどうかと云ふに、彼れはスミスに倣つて、第一に將來のために使用される富の一部として、第二に利潤をもたらす富の一部として定義してゐる。この二つの定義は決して同一ではない。シスモンディは例を擧げて、この二つの定義が同一でないことを裏書してゐる。一方に於いて、彼れは孤立人に於ける資本を認めてゐる。是は彼れの第一の定義と全く一致するものであるが、決して第二のそれとは一致しない。蓋し孤立人が利潤を得る筈はないからである。他方では、彼れは資本家によつて購買された勞働を資本と看做してゐる。是は第一の定義とは一致しない。勞働も、これを買ふために前貸された資本も、生産手段と觀ることは到底不可能である。しかし購入された勞働は利潤をもたらすので、第二の定義に從つて資本と考へることができる。「勞働者の唯一の收入は勞働である。然しこの勞働はその主人のためには資本に變ずる」。

彼れは一方に於いて、資本の概念と社會的再生産の物的觀點とを結びつけようと試みた。「孤立人の眼には、總べての富は欲望の起る場合のために豫め蒐められたる貯藏物にすぎなかつた。併し乍らこの貯藏物の中に於いて二つのものが既に區別せられてゐた。即ち一は直接若しくは間接の使用に充てるために貯へられたる部分であり、他は新

しい生産のために必要とする部分である。斯くして小麥の一部分は次の收穫迄彼れを養はねばならなかつたし、播種のために保存せられた他の部分は次年に果實を結ばねばならなかつた。社會の形成、交換の導入は、この播種のための部分を無限に增加せしめた。資本と稱せられるものは則ち斯かる富の一部分である」（註一）と。

註一　Sismondi, op. cit, tome I, p. 85.

彼れは進んで資本蓄積の過程を論ずる。「社會に於いては、富者は貧者を勞働せしむることが出來る。耕作者は次の收穫まで必要と思ふ總べての小麥を保有した後、手中に殘る餘剩の小麥を用ひて、彼れのために土地を耕し、新しき小麥を作る者、又麻を紡ぎ羊毛を織る者……等を養ふことが自己に便利であると考へた。斯くしてこの耕作者は所得の一部を資本に轉化したのである。新資本は事實上この樣にして構成せられる。……即ち所得の一部を以て勞働を雇傭するとき、其は永續的な、增殖し行く、而して決して減失することなき一個の價値となつた。これが資本である」（註一）と。斯かるシスモンディの說明の中では、單純再生產に於ても、又資本の蓄積に於いても、可變資本と不變資本の概念は明確に指示されて居らぬ。併し乍ら、彼れは資本の發生と、その蓄積過程とを認識し、是を指摘して居ると言つて好い。即ち餘剩價値は資本と勞働との交換――可變資本より發生し、資本はこの餘剩價値の蓄積より生ずるといふのである。

註一　Sismondi, op. cit, P. 88-89.

續いてシスモンディは社會的總生產物に於ける生產と所得とを異れる要素に分析する。――「勞働雇傭者は耕作者と等しく生產的富の一切を播種の爲めに用ひない。彼れは勞働をより容易、より生產的ならしむるが如き機械に使用する。斯くて富が繼續的に種々なる種類に分れるをみる。社會が蓄積したる富の一部分は、これをその占有者が、徐々なる消費によつて、勞働を最も有利ならしめるために、人間を盲目的な自然力によつて勞働せしめる爲めに使用する。固定資本と稱せられるのは則ちこれである。富の第二の部分は、直ちに消費され、而してそれが作つた製作物の中に再生產せられ、絕えず形體を變化しつゝも同一價値を保有するものである。これを流通資本とよぶ。最後に富の第三の部分はこの第二の部分より派生したものであつて、完成せる製作物から、それを作るために用ひた元資を差引いた過剩價値である。資本の所得と稱せらるゝものは是れであつて、この價値は再生產せらるゝことなくして消費さるべきものである」と（註一）。斯くの如くシスモンデイは社會的總生產物を不變資本、可變資本、及び餘剩價値なる範疇に分割し、而して消費を中心とする富の運動を以て極めて抽象的であり、且つそれを把握する爲めには大なる注意力を必要とすると言つてゐる（註二）。

註一　Sismondi, op. cit, Ire éd. tome I. p. 93-94. 2me éd. tome I. p. 93-94.

註二　Sismondi, op. cit, Ire éd. tome I. p. 94-95. 2me éd., tome I. p. 94-95.

シスモンディは、擴大再生產過程を認識すると共に、更に進んで資本の有機的組成の高度化に論及し、これが恐慌の有力な原因であることを指摘する。

資本制生產の本質は自由競爭である。この自由競爭により、恐慌の危險は增々大きくなる。生產者は互に敵とな

り、市場を奪ひ合ひするに至る。各資本家の目指すはたゞ價値増殖のみである、價値増殖慾こそ資本制生産の唯一の原動力である。從つて各人は私利のみを目的とし、他人の破産を犠牲として自己の財産を増さうと努める。一切の産業家の間に一般的競爭が行はれる。この爭に於いて勝利を占めるためには、低廉な價格で販賣しなければならぬ。斯くして各資本家は生産費の低下を工夫せねばならぬ、即ち生産過程の改善、機械の改良を行ふことが必要となる。總資本中の不變資本部分は益々増大し、可變資本部分は減少の道をたどる。斯くして生産はいよ〳〵増大する結果となるであらう。その結果、販賣價格の低い生産業者が勝利を博する。この反面、他の生産者中に破滅する者が現れて來るといふ。然し競爭に於いて、敗けた製造業者はその企業を拋棄してしまふことはできない。少い利益に、大部分は損失に甘んじて生産を續行する。蓋し彼等の固定資本は總資本中、非常に大きい割合を占めて居るからである。斯くして彼等はその投資を回復するために、生産を尙一層増加せんとするのである。一方勝利者たる諸企業も、その勝利を徹底し完全に相手を驅逐するために、販賣價格從つて生産費を切下げようとして、その生産の増大を企圖する。爭ひはかくの如くして無制限に發展して行く。生産の増加は價格を引き下げ、この價格の低下は更に生産を一層過剰ならしめる。この循環から吾々が逃れ得るのはたゞ破滅の方法あるのみである。その結果恐慌が繰返されて産業を攪亂する。恐慌の原因は既に資本制生産そのものゝ中に、その擴張再生産過程の中にその種が播かれて居るのである。斯くてシスモンディは資本制生産そのものゝ中に存する矛盾の必然的結果として恐慌を指摘して居る。

四

更にシスモンディは市場の複雜化を以て、恐慌の一原因と做してゐる。この點は彼れの恐慌理論中に於いてさして重要な部分ではないが、問題を明らかにするために之を述べておかう。市場の複雜化によつて、生産者は市場を見透すことが困難となり、更に變化する市場への適應が益々困難となる。而かも是等の困難は競爭生産者の存在によつて倍加されるといふのである。

シスモンディは言ふ――商業の移入によつて、何人も最早や自身のために働かないで、未知者のために働く。それ故に、欲求とその充足手段との關係、仕事と所得との關係、生産と消費との關係は不安定なものとなつた。生産者は常に市場の知識を持たねばならぬ。然るに市場を決定するものは消費者の數、その嗜好、その消費の大いさ、その所得の大いさの四者であり、然も是等のものはそれ〴〵獨立に作用して市場を常に動搖的ならしめるのである。

右の如き市場の動搖を正確に認識することは非常に困難であるが、この困難は各生産者に對して他の商人及び彼れの競爭者の數及び資力が知られないといふ事實によつて益々増大するのである。

又市場への適應の困難なる一點に就いては、シスモンディは次の如く論じて、スミス、リカアドオ、及びセイの樂觀論を攻擊してゐる。

生産は需要との關係に於いて増減すると言ふが、この運動（需要への適合の運動）は正常的に行はれることは不可能である。生産を膨脹させ、一般的幸福を擴大した需要は、期待された結果が起る以前に、生産過剰を生み出し、

全國民に長期の慘憺たる苦惱を味はせるのである。

シスモンディがかゝる適應運動の困難なる理由として考へるものに二つある。その一は勞働移動の不自由であり、その二は資本移動の不自由である。

彼は說く――一企業の勞働者が他の職業に移り得るのは稀である。勞働者が長期の、時には高價な學習によつて得た熟練は、彼れの富の一部となつて居るものである。若し彼れが他の仕事に轉向するならば、この富を拋棄することを意味する。のみならず、仕事の轉換には――他の產業で勞働に對する不斷の需要があるかどうかも疑問であるが、このことは問題の外に置くとして――新たなる資本が要る。それを勞働者は持つて居ない。故に彼等はその部門での生產物に對する需要が減退したからとて、容易に他の職業部門へ移動し得るものではない。より劣惡な勞働條件―勞働時間の延長、低賃銀―を甘受してもその部門に止まらざるを得ない。

資本の移動も不自由である。それは殊に固定資本に於いて甚だしい。一人の木綿製造家は、多大の費用を投じて巨大な工場を建てた。遠方から水流を導いて齒車を廻轉させて居る。又彼れは各勞働者に高價な要具をあてがつて居る。彼れの資力の半分、否四分の三までが、木綿製造のために活動して居る。所で今買手が彼れに支拂ふ價格が利子と費用を償ふに足りぬとする。然しそれだからと言つて、彼れはその工場を閉鎖すべきであらうか。それに對する答へは明らかに消極的であらねばならない。彼れは自己の固定資本からの所得の半分を失つても、他の半分を獲得するために、依然として木綿を生產しつゞけるであらう。蓋し工場を閉鎖すれば全所得が失はれるのであるから。

五

一方に於いて、シスモンディは生產物に對する所得不足を以て、恐慌の原因と考へる。而して彼れの恐慌理論の中心をなすものはこの部分である。殊に彼れの問題とするのは勞働者の消費が益々制限されるといふことである。

シスモンディによれば、消費は無限に發達すべきものではない。「社會人の慾望は其の勞働が無限に種々なる享樂を提供するが故に限りなきものゝ如くである。人は如何に多くの富を蓄積したとても、これで充分であると言ふ機會には到達せぬであらう。常にこの富を享樂に代へ、又少くとも自己の使用に充てるの手段を見出すであらう。併し乍ら現代經濟學者の大部分が陷つて居るやうに、消費を以て何等の限度もなき、常に無制限の生產を消化せんとしつゝある力と思惟するのは大なる誤謬である」（註一）。然らば社會の消費は何によつて局限せられるか。これを決定するのが彼れの所得論である。

註一　Sismondi, op. cit, tome I, p. 75-76.

「凡そ一國の支出はその國の所得に制規されなければならぬ。この所得には二つの性質があつて、一は富者に於ける物質的利潤、他は貧者に於ける勞働能力である。富者は自己の所得を生ずる所の富に基く利潤を、自己の欲望若しくは願望を充足すべき如何なる消費對象物と交換すべきかを熟慮しなければならぬ。けれども若しその所得を超えて之を行ふならば、必然その利潤を產む所の富より成る資本それ自身から借入を行はねばならなくなり、將來に於ける自己の利潤を減じて破滅に導かれる。他方、所得としてその勞働のみを有する貧者は、これを支出するに先

立つて、富者階級に依存してゐる。彼等は斯る勞働を實現しその果實を享樂し得る前に、これを賣らなければならない。而して彼等は富者の中自らのためにその所得を費したる後、尙ほ殘れる資本を以て貧者と交換を行ふ者に對してのみこれを賣ることができる。勞働能力はこの能力が使用せられるや否や一個の所得となる。……この勞働能力が全部雇傭せられるとしても、需要力に從つて其の價値は增減する。この故に貧者はこの勞力を賣却した後に於いてのみ、その所得を支出するであらう。然かも彼れはその勞働を賣却したる價格に從つて、その支出を規制するであらう。この價格を超える一切の支出は……彼れ自身及び社會を破滅せしめ、又この價格の不足若しくは杜絶によつて蒙る一切の窮乏は、生命、健康又體力を害ふや否や直ちに將來の勞働能力を破壞するが故に……等しく社會を破滅に導くことになる。斯くして、貧者も、富者と同樣、その支出をして實現せられたる所得を超える を得ざらしむべく、而して一切の社會的支出は社會的所得によつて規制されることになる」（註一）。

註一　Sismondi, op. cit, tome I, p. 113-115.

一方に於いて消費の高は所得の高に制限せられるといふシスモンディは、他方に於いて一國の支出は消費に向けられる基本中その國の生産全體を吸收しなければならないと說く。

「人間勞働の唯一の目的はその欲望を充たすにあるのであつて、使用にあてられたる生産物のみが價値を有する。……而して富が斯かる目的を達せざる場合には、其はこれに代るべき等量の再生産を妨げる」（註一）。

「社會に衣食住の不充分なる個人が多數に存在する場合、社會の欲する所はその購買し得るものに限られ、而して その購買し得る所はその所得に限定せられる。今若し社會のため富者が自己の資本所得より取立てる以上の奢侈品が生産されるとすれば、富者は恐らくそれ等を取得せんと望み、それより新しい享樂を抽出し得るの方法を認めるであらう。けれども彼等は破滅の危險を冒して之を購買することはしないであらう。何故ならば、そのために自己の資本に就いて借入を行ひ、換言すれば貧者の現實所得のみならず自己の將來所得をも削減しなければならぬからである。從つて斯かる奢侈品を生産したる者も亦富者の所得と交換し得ず、又その資本を回收することができずして、その生産を再開することが出來なくなる。斯くして彼れの勞働は停止せられるであらう。又若し貧者が消費し得る以上ではなくて、その勞働と交換に所得より取得し得る以上に、彼等のために生活必需品が生産されるとすれば、疑もなく彼等は生活を向上せんとの强き希望を持つであらうが、事實はさうしないであらう。何等ならば彼等が斯く望むの故を以て、富者は彼等に一層高率の賃銀を支給せず、又一層多くの勞働を彼等に要求しないからである。即ち彼等自身より言へば、勞働より外交換に與ふべきものなく、又若し少額の消費基金があるとしても、そのために、より貧しくなるからである。從つて小麥は饑餓に瀕しつゝある多數の人々を前にして、賣れずに殘るし、又生産者は資本を回收することができぬから、勞働を停止すると等しく再生産のために投資し得なくなるであらう。時として生産過剩が價格の低落によつてより大なる消費を導くことはある。然しその結果はより有利ではない。若し生産者が富者の所得を超ゆること二倍の奢侈品を市場にもたらし、これを賣却し盡さんとすれば、是等の價格を半減しなければならぬ。この場合、富者はより安く購入し得るが故に消費者として利する所があつたと信ずるであら

う。けれども富者の中には生産者が含まれて居るから、富者は消費者として利する以上に生産者として損失を蒙ることとなる。年生産の販賣に就いて、五割の損失が彼等の資本及び所得に及び、而してその所得の減少は、次年度の消費減少を、その資本の減少は、貧者の勞働に對する需要の減退を來すであらう。又若し生産者が勞銀の價値に二倍する生活必需品を市場にもたらすときは、この勞働の價値でこれを全部賣却しなければならぬから、五割の損失となるであらう。……從つて矢張り貧者の所得たる勞働の價値は半減するであらう。斯くの如くして所得によつて制限せられる一國の支出は消費基本の中に生産の全部を吸收しなければならない（註二）。

註一　Sismondi, op. cit, tome I, p. 115.

註二　Ibid, p. 117-119.

六

シスモンディの見る所によれば、經濟社會の健全なる進歩發達は事態が斯くの如くある場合に於いて始めて期待せられるのであるが、生産者が互に無制限なる競爭を行ひつゝある現代の經濟組織の下に於いては、正しく一國の所得は相對的に減少する傾向をもつてゐる。そして資本制生産社會に於いては、必然に資本蓄積のための機械採用が行はれ、從つて過剰人口による勞銀の低下、財貨需要力の減退の結果は自ら過剰生産にならざるを得ないといふ。

「分勞は絶えず生産力を增加し、資本の增殖は新しき用途を求めねばならないから……生産者は自己の市場擴大を最大の緊要事とする。……而してその財産の增大は總べて販賣の擴大に依存する。この故に商人は新しい所得に對する交換が自己に提供せられる場合には、同業者を犧牲にしてその販賣を擴大せんことに熱中し、富の增加をこれに比例せしめんとする。……又製造業者は勞働若しくは材料の使用に何等かの節約を見出さんと絶えず注意する。然るに材料はそれ自體、前勞働の生産物であるから、彼れの節約は結局常に同一生産物に對して、より少量の勞働を雇傭することに歸せられる。……個別的に考へれば、製造者の目的は一部の勞働者を解雇することではなくて、同數の勞働を雇傭し、且つより以上の生産をあげることである。然し社會的に見れば、他の製造者が直ちにこれに倣ふが故に、結局新機械が勞働の生産力を增加しただけ、誰かが自己の勞働者を解雇しなければならなくなり、……全體としての彼等の消費はそれだけ減少するであらう。斯くして舊式産業は沒落して行く。洵に消費者は競爭の結果利益を得るであらうが、斯かる利益は勞働の減少と比肩すべくもない。……この故に發明の結果は總べての者に對する損失、一國所得の減少となり、そのために次年の一般消費力をより弱めることになるであらう。……今日迄新しき方法の發見は大なる國民損失、所得の、從つて消費の大減少を來した。それはさうならざるを得なかつたのである。何故ならば、勞働それ自體が所得の重要なる一部分を構成するから、需要勞働を減少することは當然國家を貧窮ならしむるからである。……然らば人間勞働を節約する技術の發見はすべて一部の人類に對して恒に不幸であるか。勿論さうではない。人間によつて充足し得ざる勞働がある場合、これが機械によつて完成せられることは幸である。人間勞働が全部雇傭され、且つ生産が機械によつて行はれるならば、社會は利益を得るであらう。けれども斯かる利益は機械が人間に代置することによつてのみ獲得し得られるから、それは結局人類の災厄である」（註一）。

註一　Sismondi, op. cit, Ire éd., tome I, p. 315-325.

尙ほ機械の災厄に就いては、彼れは再版に次の如く附け加へてゐる。「人間の勞働力を倍加する技術の發明は……皆役に立つが、それは消費との關係に於いてのみ有用に使用せられる。消費者がより多量なる生産物を欲求する場合には、發明は同量の勞働を以てそれを取得せしめるが故に有用である。又若し消費者がより大なる生産物を欲せざる場合には、發明は生産者に對して一層長き休息を與へるから尙ほ有用であらう。……社會はより大なる生産力の獲得によつて苦しむのでなく、その惡用に惱むのである」（註二）。

註二　Sismondi, op. cit, 2me éd., tome I, p. 349-50.

富の增加より生ずる生産が確かに消化し盡くされれば、この增加は社會を利する。然し資本主義社會に於ける分配の不平等、資本の蓄積は、現實上販路を狹隘化して、生産過剩を惹起せしめるのである。「總べての人の安易及び享樂が殆ど平等なるか、或は多數者が窮乏の中にあるに少數者が豐潤に飽くかは、國民の幸福にとつて無關係のものではない。これと等しく、收益の分配も亦富の增加に無關係のものではない。享樂の平等はその結果として生産者の市場を常に擴大すべきものであり、その不平等は常に益々それを縮少せしむることとなる。同一收益は富者及び貧者によつて等しく消費せられるけれども、その消費態樣は同一でない。富者は貧者よりも資本を用ふること遙かに多く、勞働を投入すること極めて尠い。從つて富の再生産に殆ど資する所がない。……十萬リーヴルの所得が一人に屬しやうと百人に分たれやうと、等しく消費に向けられることに變りはない。然し斯かる消費は同一性質のものではない。極めて富裕なる者は無限に多くのものを使用するに非ずして、一層良質のものを需要し、……斯くして不生産的勞働者に賃銀を支拂ふこととなる。……又、この所得が百の家族に分たれて居る場合には、一層良質のパン・肉を食ひ、葡萄酒・麥酒を飲んでその國の農業を促進せしめるであらう。又一層品質の優れたる內國製の衣服を纏ふであらう。……斯くして國內工業に發展力を與へるであらう。若し同一所得の大部分が一人の富者に專用せられ、殘額が九十九人の極貧者に分配せられる場合には、一國産業に對して與へられる刺戟は右の場合よりも遙かに弱いであらう。……資本蓄積の結果は一般に勞働を大工業に集中せしめるが、巨大なる財富集積の結果は斯かる大規模産業の生産物、從つて富の消費を殆ど絕對的に排除することとなる」（註一）。所得の分配の不平等の結果として、一方では蓄積された富が資本家をして大規模なる工場生産を可能ならしせると共に、他方ではその富がまたこの大工場の生産物を富者の消費から引離してしまふと彼れは考へる。

註一　Sismondi, op. cit, p. 357-361.

斯くの如く、資本制生産關係は一方に於いて資本の蓄積、富の生産力を刺戟するが、それと同時に、消費と生産との均衡は必然的に破れて生産過剩を惹起するといふ。かゝる國內恐慌の理論は同一過程に於いて世界恐慌の說明になる。

「以上の如く、財産が少數所有者の手中に集中せられるために、國內市場は常に益々狹められる。從つて産業は常に益々販路を外國市場に求めざるを得ざるに至るのであつて、……生産が消費を超ゆる國はすべて等しく外國市場

に注意を向けることになる。……併し乍ら世界市場に於いても亦事情は國内市場の場合に等しい。……世界販路の擴大は世界的繁榮の結果としてのみ可能となり、而して消費は新所得の額に限定せられる。……然かも各國の消費力は前述せる如く增進することができぬ。生産は消費を超え、製造は資本額に比例して需要に比例せず、然かも商人は新販路に向つて殺到して順次に沒落し行くの事實は、種々の商業報告、新聞、旅行者の談話によつて明白である」（註一）。

註一　Sismondi, op. cit, p. 361-364.

斯くして、シスモンディは「生産消費の不均衡、生産者の沒落過程」といふが如き極めて明瞭なる眼前の事實を、正統派經濟學者は何故に理解しようとしないかと反問し、彼等の誤謬は彼等が年々の生産と所得とを同一視するに在ると述べてゐる。故に彼等は「生産は增加しつゝあるに、資本利潤及び賃銀は屢々同時に低落することある所以を説明することが出來ない」と論じ、而して又「年々の所得を年々の生産物と混同することは經濟學全體を蔽ふに厚き幕を以てする所以に外ならぬ」といふのである。シスモンディに由れば、この兩者を區別するとき初めて一切は明瞭となり、すべての事實はその理論と一致すると。この點に關して、アフタリオンは、シスモンディが所得と言ふのは謬りであつて、正しくは支拂手段と言はねばならぬとしてゐる（註一）。

註一　Aftalion, op. cit. p. 109.

七

シスモンディの恐慌論は彼れと正統學派との間に活潑な論爭を惹き起した。「經濟學新原理」出版直後、マカロックは Edinburgh Review 上に匿名でシスモンディ批判を揭げ、シスモンディはその反駁文を一八二〇年ロッシの「法學年報」に「消費は社會に於いて常に生産力と共に增加するやの問題に對する檢討」といふ題で揭げた。尙ほ彼れはリカアドオの一門下マカロックと論爭したのみでなく、リカアドオ自身とも爭論する機會を得た。即ち一八二三年リカアドオが幾日かをジュネーヴに送つたとき、シスモンディは恐慌の問題に就いてリカアドオと討論し、そしてその結果を筆にして翌年五月 Revue encyclopédique に「生産・消費の均衡について」といふ論爭文を寄せた。ところがこのリカアドオ駁論は遂に市場理論の主唱者セイを論爭場裡に登場せしめた。セイは既にマルサス宛の書翰でシスモンディに答へたが、更に七月同じく Revue encyclopédique を藉りてシスモンディ反對論を發表した。勿論シスモンディはこの反對論に對して再び反批判を公にし、前のリカアドオ評の言葉を採錄してセイの理解不足を難詰したのである。このやうな論爭を通じてシスモンディの恐慌論は一層明らかになつてゐるが、こゝに一々紹介する必要はなからう。それは既に舊稿に於いて充分に取り扱つたところであり、また增井博士の論文「生産消費の均衡に關する論爭」（本誌十九卷四號所載）で極めて詳細且つ明確に説かれてゐる。そこで私はシスモンディの生産・消費不均衡論を他の分野から明らかにしよう。

シスモンディは恐慌と勞働者の貧困とを資本主義組織の二大災害であると考へたが、この兩者は互に他を深刻化する相關的な災悪であるといふ。即ち企業家を破滅せしめる恐慌は勞働者の貧困を一層激化し、反對にかゝる勞働

者の貧窮は恐慌の永續的な原因となる。故にシスモンディの恐慌理論を理解するためには、勞働者の條件に就いて彼れの意見を知る必要がある。

先づ彼れは大工場に於ける勞働者の狀態とギルド組織下の職人の狀態を對比することから理論を展開して行く。彼れは後者を樂觀的態度を以て觀察し、手工業の種々の長所を讃美してゐる。之に反して、前者に對しては、彼れの見解は極めて悲觀的である。そして彼れはこの場合資本と勞働との分離を說いてゐる。

資本主義的生産に於ては、工場を獲得し機械を購入するために大資本を要する。故に勞働する者と生産手段を所有する者とは必然的に分離せざるを得ないのであつて、然かも勞働者が資本家として浮び上ることは絶對に不可能だとみる。

斯くして生産手段を剝奪された人々、即ち生きんがためにたゞ勞働力のみを有する人達は、その仕事を求めるために資本家に依存せざるを得ないのである。そしてその勞働力が彼等にとつては所得の唯一の源泉である。併しながら資本家がその勞働力を購はざる場合には、彼れの勞働力は毫も價値を有するものではない。自由競爭の下にあつては、資本家同志互に敵となると同時に、勞働者に對しても對立的立場をとる。斯くて兩者の間には永續的な鬪爭が現れるのである。

資本家は勞働者に對し最も苛酷な條件を課さうと努め、一方勞働者も最良の條件を獲得しようとする。その結果は永續的鬪爭である。併しながら、かゝる鬪爭は不公平である。蓋し資本家が勞働を欲する程度と比較して、勞働者がその生活資料を得んとする慾望の方が遙かに大であり、且つ自らそれを獲得することは不可能であるからである。更にもう一つの理由がある。自由放任の組織に於いては、資本家と勞働者との間に利害の對立が存するのみならず、この對立は勞働者相互間に於いても存する。又諸々の理由から勞働人口は絶えず增加する。故に勞働者は資本家から與へられる如何なる條件に服せざるを得ない。企業家は斯くして勞働者をして如何なる要求にも從はしむることが出來る。

シスモンディは、この災惡の原因を資本主義組織及び自由競爭に歸してゐる。蓋し自由競爭の下では、資本家は勞働者を壓迫するのでなければ競爭相手に打ち勝つことが出來ぬからであり、更に過剩生産、その結果としての破産から免れるためには、勞働者を搾取するより外はないからである。

シスモンディは工場に於ける勞働の一般的條件に關して論じた後、更に進んで賃銀に論及してゐる。

勞働者は資本家に對し從屬的地位に置かれてゐるから、極めて僅少な賃銀、即ち彼れ及び彼れの家族を維持するに足りるか足りない程度の賃銀で滿足しなければならない。從つて企業家の利潤はそれだけ大きくなる。一方に於いて、勞働者はその需要を最低必要にまで限定しなければならなくなるに反し、他方では、資本家は生産力の增進からひとり利益を享けることになる。勞働者は經濟的進歩によつて毫も利益を享けてゐない。その報酬が增大せぬ限り、生産の增大、産業の繁榮は彼等にとつて問題ではない。蓋し勞働者の隷屬的狀態及び相互間の競爭によつて、その賃銀は旣述の如く最低必要限度にまで局限されてしまふからである。斯く勞働者に極めて僅少な賃銀を支拂ふ

といふ事實によつて、多くの產業家はその生產を續けることが出來、且つ利益をうることができる。この利益は洵に勞働者の犧牲によつて實現し得る性質のものである。

次に勞働の增加がある。勞働者は資本家に從屬する。その結果として生起することは單に賃銀の低下といふ事實のみではない。更に勞働者、一層一般的に云ふと、勞働者の家族の勞働の增加がその結果として惹き起される。資本家は最少の費用を以て最大の生產物をあげるために、勞働者に對する報酬を減ずるのみで滿足せず、僅少な報酬を以て、長時間の勞働に服せしめ、又女子供の勞働をもこれに附け加へようとする。機械生產の結果として、機械は勞働者の仕事の大部分を奪つてしまふ。故に勞働者の生產力は大いに增加する。併し乍ら、それだけ勞働者に閑暇ができると考へるならば、それは明かに誤りである。事實は正しく反對である。資本家と勞働者が分離した今日では、勞働者は資本家の要求に從はねばならぬから、勞働時間は縮少される所か、却つて延長されるのである。

更に勞働時間が延長されるばかりでなく、子供及び女子の勞働が用ひられる樣になる。機械を運轉するには大した力は必要でない。だから生產費引下げのため、資本家は兩者を雇傭する。此等に對する賃銀は少額であるからである。

斯くして、勞働者の家族の全員が非常に長時間工場に於いて勞働に從はされることになる。然しその收入は毫も增加しない、依然として最低必要限度に局限されるのである。勞働者の家族の勞働の增加は、一國の生產を增加せしめることは、シスモンディも之を認めてゐる。然し勞働者はそのことから何等の利益も享け得ない。それ所か勞働者の狀態は益々苦しいものになる。勞働者の困窮は富者の奢侈に對し種々の新たなる享樂と新たなる逸樂とを附與するに役立つのみである。然しこれも一時的なものにすぎない。過剩生產の結果として資本家自身破滅に瀕する。從つて勞働者の條件は益々惡化し、失業するものが多數に上るのである。茲に相對的過剩人口の發生が考へられる。

八

機械の採用による勞働者の廢除が述べられる。生產費を引き下げるために、資本家は勞働者の報酬を最低必要の限度にまで減じ且つ勞働時間を延長する。然し彼等はこれだけでは決して滿足しない。更に進んで彼等は人間の勞働を節約せんとし、それを無用のものたらしめんとする。彼等はその仕事を機械によつてなすことにより、勞働者を解雇しようとする。その結果、勞働者の地位は益々不安なものになり、明日の保證を奪はれてしまふ。

發明は消費の欲望を未だ滿足せしめてない樣な生產を促進する場合に限り大きな幸福の源泉となり得る。その場合には勞働者の數は減少しない。而して新しい機械的改善によつて需要の增加するにつれ、換言すれば販路の擴大するにつれて必要となる一層大きな分量の商品を生產することができる。之に反して生產がすでに消費に對し充分足りてゐる場合には、事情が異つて來る。この場合には機械が勞働者の勞働に代置されるから、後者は無用のものとなる。資本家は勞働者を解雇する。斯くして發明は國民的不幸(Malheur national)となる。資本家は成程商品の生產費を低下せしめ得る。從つて一層低い價格でそれを販賣することが出來る。それ故に消費者の享樂は增大するであらう。然し結局は生產過剩に陷るから、生產者自身は破滅に瀕するか、又は利益を失ふに至る。

過剰生産の問題に就いては、シスモンディは既にセイ及リカアドオに反對して、企業者や固定資本が産業の一部門から他の部門に移ることの困難を論じた。彼れは勞働者に關しても、同樣の困難が存することを述べてゐる。一つの職業には長期間の修練が必要である。故に他の産業に移つて新しい修業をするよりは、勞働者は寧ろ低賃銀で長時間勞働する方を選ぶであらう。競爭は失業勞働者の間に於いて一層恐るべきものとなり、而して又それはすでに悲慘なる勞働者の運命を一層惡化させるに至る。然し再び均衡が回復されるであらうが、その均衡こそ勞働者の一部が困窮に堪へかねて死滅するからである。

シスモンディはこの機械による苦惱を過渡的なものと做す說を否定する。この過渡的狀態こそは正に無限に存續せんとするものである。機械的方法が絕えず新たにせられ行く資本主義組織では、これが正常な狀態であるといふ。

勞働者の苦惱に關する種々の主題に關してシスモンディがなした分析は、更に彼れをより大きな綜合即ち新たなる勞働條件の結果たる社會組織の概括にまで導いてゐる。昔の産業に於いては、親方とその使用人の狀態の差別はさして大きなものではなかつた。今日では之に反して資本家と勞働者の間には深い溝が生じた。而してこの溝は一日々々と深く且つ大きくなりつゝある。

近代の勞働者にとつて、その生活を向上し、その狀態を改善せんとする希望は存し得ない。生産の手段を獲得せんとするには巨大な資本が必要である。勞働者がその所有者となり得ないことは勿論である。生きんがためには、生産手段の所有者に傭はれることが是非必要である、故に資本家によつて與へられる低賃銀で滿足しなければならない。

相續く發明が勞働者に代ふるに機械を以てし、彼等から生計の手段を奪つてしまふ。彼等は職を見出すことそれ自體を幸福と考へねばならないのである。かくの如くして、新しい一つの社會階級が構成されるのであるが、その階級の運命は極めて悲慘であり、何等の財産をも繼承しないものである。「プロレタリヤの導入こそ社會に起つた根本的變革である。その名はローマ人から借りたもので極めて古いが、その存在は全く新しい」。

プロレタリヤは勞働力以外の他の資力を全く所有しない。彼れこそ生産に於ける一切の勞働を負擔し、全社會人をして生活するを得しめるものであるが、自らは殆ど生活するに足りぬ程のものしか收受できないのである。換言すれば、彼れはその手から一切の富を創造するが、その富に參加することができない。「恐るべき現實が突然人々を惱ますに至る。其は困窮の出現であり、その恐るべき擴大である」。

プロレタリヤ階級は恒に益々困窮に苦しめられるに反し、資本家階級はいよ〳〵富裕の度を增大する。ギルド組織下では、生産物は一團の小企業家に分配されてゐた。彼等の利益はそれ程大きなものではなかつたが、幸福な獨立の中に生活してゐた。ところが大規模生産の發展と共に、是等の小企業家は强力な競爭相手に打ち勝つことができなくなり、獨立を斷念するの餘儀なきに至る。そして彼等はプロレタリヤの列に加はるのである。斯くして中間階級は姿を消してしまひ、資本家とプロレタリヤとの對立が明瞭な事實となつて現れる。又資本家相互間の競爭も激烈であり、最も資力ある者が存續し、他の者はこれ亦プロレタリヤに轉化する。資本家の數は益々減少するが、之

に對應してその富は迅速に增大する。機械の改善による生產力の增大の結果として、利益を享ける者は彼等である。勞働に對する價格は停滯的である、否、低下の傾向さへあるに對し、かゝる資本家の所得は大を加へるが、これはプロレタリヤの賃銀よりの收奪に外ならないのである。その結果は異常なる富裕の實現であり、金權貴族政治の實現である。

極端なる富裕と極端なる貧困と對立、絕對的服從と限りなき權力の並存、これこそ資本主義の著しい特色をなすものである。この二つの階級——少數の强力な資本家とプロレタリヤ大衆——の間に存する顯著なる差違は治安攪亂の要因が多分に含有されてゐる。彼れによれば中間階級の存在は既存の秩序維持の最も强き保證である。その存在が今や失はれて了ふと。

九

斯くの如く資本制生產に於ける矛盾を判斷したシスモンディはこの理論とそれに對する政策との問題を歷史的關係に於いて次のやうに述べてゐる。

「私は機械の發見、文明の進步に反對するものではない。私は自由競爭のもとに於いて勞働者に何等の保證も與へない現行社會組織に反對する。……吾々の目は社會のこの新しい組織、一般的に階級鬪爭にのみ注がれるため、現實社會以外の存在を認めないのである。人は先行社會組織の害惡を私に示すことによつて、私の不合理を說き得ると信じてゐる。事實上吾々は現實社會に劣るやうな二三の社會制度を經て來た。然しこのやうな制度のもとに於いて甚だしい苦痛をうけて來た後、今日の社會に進んだからと言つて、現在の社會組織、雇傭制度が正當であるとは論結出來ぬ。奴隸制度、封建制度、ギルド制度の有力であつた時代には、如何なる制度がこれにつゞくかは、知ることが出來なかつた。乃ち現存組織の改良は不可能であり、また笑ふべきことのやうに思はれたであらう。吾々が奴隸時代を野蠻視すると同樣に、新時代のものは吾々が勞働階級に何等の保證も與へなかつたことを以て、吾々を野蠻視する時代が確かに來るであらう。……吾々は經濟學者をして自己の科學の今日の誤つた道を辿り來つたことを知らしめやうと欲するものである。然し乍ら吾々は彼等に正しい道を指示するだけの自信を持たない。社會の現實組織を理解することは出來得る限りの精神的努力を必要とする。現在を理解することにさへこのやうな困難があるのに、未だ現れない組織を意識し、將來を洞察することが誰に出來るであらうか。この故に吾々はは先づ現在社會の分析を遂行しようとするものである」（註一）と。

註一　Sismondi, Nouveaux principes, 2me éd., p. 443-449.

思ふにシスモンディの著書の主要な關心はその當時に起つた事象に科學的說明を與へることではなかつた。その點では多くの批判者によつて指摘されてゐる通り、充分に滿足ではなかつたのである。彼れの分析は屢々外面的であり單純であつた。彼れの功績は寧ろ當時支配的であつた正統派經濟學が看過せんとした事實を浮き出さうとしたことであつた。彼れはメダルの反面を斷乎として示した。シスモンディに於いては、最早や利害の自然的調和を物語ることは到底不可能である。また生產の發展に隱された悲慘や苦痛を忘れたり、恐慌を過渡的な現象とみたり、財

産・所得の不平等な分配が經濟社會に於いて演ずる役割りを忘れたりすることも不可能である。一言でいへば經濟的變化の社會的歸結を忘れることは最早や不可能である。斯くて彼れは社會經濟政策を說いた。

先づ彼れは生產に對し、個人のイニシアティヴに對し一つの制限を付してその弊害を矯正しようとする。かくて彼れは干涉主義者となつた。彼れによれば、國家の活動は第一に生產の奬勵を制限し、發明の急速な增加を差控へさせることである。彼れは昔のギルドや半家長的小規模生產に密かな同情を寄せてゐる。其等は生產の利益に反するものとして非難はしてゐるが、彼れは尙ほ且つ競爭の弊害に對して一つの制限を設くることの敎訓を其處に學びとり得ないだらうかと自問してゐる。

また大規模生產による勞働階級の貧困化をみたシスモンディは小工業及び小農業の建設を說いてゐる。彼れは工業にあつては獨立職人の出現を望み、農業に於いては、家長所有即ち有產的農民の增加に歸へることを强調した。「私は都會の工業で一人の雇主のもとに幾百幾千の勞働者達が命令されて集まるのではなしに、田舍の工業に於けるやうに多數の獨主工場主達によつて分布されることを望む。製造工業の財產は幾千人を雇ふ一人の雇主の手中に收められるのではなくて、多數の中位の資本家達によつて分布されることを望む」（註一）と。

註一　Sismondi, Nouveaux principes, tome II, p. 365.

そして彼れは職業上の保證を說いた。――「改良の實行として私は立法の徐々たる且つ間接的なる手段を要求する。雇主と勞働者との間に完全な公正を要求し、雇主は勞働者に蒙らしめて禍害については全責任を負ふことを要求する。私は法律によつて遺產の集中ではなくて分散を常に奬勵することを要求する。法律は雇主が勞働者と密接に結びつき、勞働者を一層長期間に亘つて雇用し、事業の利益に參加せしめることによつて雇主に金錢上及び政治上の利益を見出さしむべきである。さうすれば個人的利益はよく指導され、それが社會に與へる害惡は排除せられるであらう。そこで工業主は勞働者の地位を改善し、所有と節約とに對する勞働者の興味を喚起するやうに、換言すれば、勞働者を人間・市民たるやうに努力するであらう」（註一）と。

註一　Sismondi, op. cit, p. 366.
Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques. p. 226-230. 古屋敎授邦譯三二一―六頁參照。

一〇

以上が「經濟學新原理」を中心として展開されたシスモンディの經濟理論とこの理論の結實たる「社會經濟」論の大要である。彼れは發展して行く資本制生產の社會に驚くべき害惡をみた。重ねて說けば、「人間力を增加する機械の發明は人類にとつて恩惠であるけれども、その利益の分配が不當であるならば、却つて其は貧者に對する禍となる」（註一）と。また「企業家の利潤は彼れが雇傭する者を搾取したものに外ならぬ。彼れはその企業が費用以上の收穫を齎らすために利得するのではなく、その費用を支辨しないために、換言すれば勞働者にその勞働に對して充分の報酬を與へないために利得するのである。このやうな產業は一つの社會的害惡である。蓋し勞働者も極度の貧困に陷れ、然かもその指導者は資本の通常利潤を確保するからである」（註二）と。

註一　Sismondi, op. cit, tome I, XV.
註二　Sismondi, op. cit, tome II, p. 92.

斯くて彼れは小經營の破壞、農村人口の減少、中間階級の沒落、勞働大衆の貧困化、機械による勞働者の驅逐、失業、信用制度の危險、社會的對立、生存の不安、恐慌等の現象を直視し、諧調的昏睡に飽和した正統學派の理論に對して辛辣且深刻な疑惑を投じた。さうしてこの疑惑は前述したやうに幾多の社會政策論に發展し所謂「社會經濟學」に昇華した。

思ふにシスモンディの恐慌論自體には幾多の不備、疑點がある。例へば彼れは商品の價値を三つの機構成部分即ち勞銀、利潤及び地代に分ち、これを以て社會の三階級の所得を構成すると見做してゐる。從つて彼れは第四の構成部分即ち機械・材料の價値として支出される資本部分を全く認めてゐない。このやうな所論からすれば、擴大再生產どころか單純再生產すらも說くことが出來ない。然し私は今シスモンディ理論の批判をしようとするのではない。彼れの思想が如何なる過程を經て成立したかを明らかにしようとするのである。

既に後年究明されたやうに、シスモンディの恐慌論は理論的に充分ではない。彼れの思想の中心は「社會經濟學」を興し、社會政策論を說いたことにある。この意味に於いてアフタリオンが「產業又は農業の形態を判斷し、過剩生產の恐慌、勞働者・農民人口の法則等を研究する場合に問題なのは、人間の一般的幸福に對する願望である。またそれがシスモンディを導いた倫理的顧慮であつた」（註一）といふのは正しい。またジイドが「學說史上に於けるシスモンディの獨創性は「社會經濟學」の研究を始めた點に在る」（註二）といふのも當を得てゐる。

註一　Aftalion, op. cit, p. 216.
註二　Gide et Rist, Histoire des doctrines économique, p. 210. 古屋教授邦譯上卷二九八頁

さうするとシスモンディの思想過程について如何なる判斷が下されるべきか。通說によると、シスモンディは「經濟學新原理」以前においては全く正統學派の使徒であつた。そしてこのことは彼れ自身の最も明瞭に認めるところであつた。即ち「商業的富について」の表題下にはスミス「國富論」の一節を引用し、また「私はスミスの學說を最も明瞭に說明し、然かも彼れの思想に一物をも加へなかつたことを誇りとする」（註一）と言つてゐる。この「商業的富について」を書いてから殆ど十五年間以上を歷史の研究に沒頭し、その間いよいよ觀察による現實的方法の必要を認めた。彼れは產業革命と同時に起りつゝあつた經濟上の現實的變化に深く着目した（註二）。特に彼れは一八一〇年及び一九年に歐洲を襲つた恐慌、そのために生じた工場勞働者の困苦によつて强く動かされた。彼れ自身英吉利に於ける見聞を次の如く述べてゐる。

「私は世界の他の國々を敎育するために偉大なる經驗を經たやうに思はれるこの驚異すべき國英吉利に於いて、生產は增大するが、悅樂は却つて減少することをみた。この國の人達は哲學者も民衆も、富の增大は經濟學の目的ではなく、萬人の幸福を與へるための手段にすぎないことを忘れてゐるやうに思はれる。私はこの幸福をすべての階級に求めてゐる。そしてこれを何處に求むべきかを知らない。事實上英吉利の大貴族は他のすべての國でみること

の出來ない程の富と奢侈に到達してゐる」(註三)。

「この貴族に次いで、商業が顯著な地位を占めてゐることをみた。商人は全世界をその企業の中に包括してゐる。彼等の代理人は南極北極の氷に挑戰する。然かも取引所に集る主人は數百萬の金を自由にすることが出來る。同時にロンドンの街々、英吉利の大都市の街々にある商店には、世界の消費を充たす商品が列べてある。けれども富は英吉利商人にそれが提供すべき幸福を保證したか。否、英吉利ほど破産の多い國はない。帝國又は共和國を維持するだけの國債を引き受け得る偉大なる財産がこれほど急速に崩壞する國はない」(註四)。

「最後に物質的進歩が萬人の目をうつこの國の豐潤は果して貧民の利益となつてゐるだらうか。さうではない。英吉利の國民は同時に現在の安易と將來の安全とを奪れてゐる。田園には最早や農民がゐない。彼等は日傭人夫となつて了つてゐる。都市には殆ど最早や工匠もなく、小工場の獨立した親方もない。たゞ工場主だけが殘つてゐる」(註五)と。斯くて彼れはこの新事象に面してこれまでの理論を變へ、新に問題の提起と新理論の展開とのため「經濟學新原理」を著したといふのである。

註一 Sismondi, op. cit, p. xix-xx

註二 Ibid, p. xx-xxj.

註三 Ibid, p. v-vj.

註四 Ibid, p. vj

註五 Ibid, p. vij

けれども前述した通りシスモンディの根本思想は倫理思想を織り込んだ「社會經濟」を說くところにある。さうすると、この思想は必ずしも「經濟學新原理」以後にはじまるものではない。既に吾々は彼れの「商業的富について」に於いて、この思想を窺ふことが出來る。成程彼れはこの書に於いてはスミス思想を祖述することに努めてゐる。そして自由貿易論を說き商業の自由を主張してゐる。「商業が自由に任さるれば、資本は自然にこれを所有する國民にとつて最も有利な方向に向つて行く」(註一)。「商業に對して要求する自由は事實上政府がその全國民に與へ得る最大の善事である。近代ヨーロッパ國民の產業的發展をとゞめるすべての障害の中で最も有害なるものは、殆どすべての立法者の愚擧から生じてゐる。彼等は法律によつて動くものではないところの商業を指導しようとする。そして自由に任される場合には何等の努力なくして一般利益に向つて行く個人の利益のバランスを自分の手で保持しようとする」(註二)。

註一 Sismondi, De la richesse commerciale tome I, p. 267.

註二 Ibid, p. tome II, p. 144.

然も彼れは本書中に於いて屢〻「社會經濟」の思想を說いた。例へばこの書の序文で「經濟學の研究は人及び人々の上に建設される」(註一)と說き、一般の幸福を主張した。後年「經濟學新原理」で「正統學派は物のために人を犧牲にしてゐる」といふ思想は既に早くこの書の中に現れてゐるのである。特に見逃すことの出來ないのは次の文字である。――「併し乍ら敏感な者は、國民中に於いて最も興味ある階級即ちその勞苦の成果によつて全く自己を養つ

てゐる階級が、有閑者であり彼等の負擔となつてゐるところの階級とその勞苦の成果を分つために、一切の享樂を奪れてゐるといふ事實を悲しみなくしてみることは出來ない」（註二）と。

註一　Sismondi, De la richesse commerciale, tome I, I, p. XV.

註二　Ibid, p. 109.

更に彼れの處女作「トスカンに於ける農業略圖」をみるとどうなつてゐるか。彼れはトスカンに於ける小農耕作の狀態をピトレスクな筆致で描いてゐる。さうして彼れは粗放大農よりも小農の耕作の優位を說いた。彼れによると、大農業は小農業よりもその純生產に於いては勝つてゐるが、總生產からみると、小農業が遙かに勝れてゐる。總生產の增加は大なる人口を養ふことが出來るから願はしいものであるといふ。「何故に一人の農業者の巨大なる利得は、多數の勞働者及び農民の乏しい勞銀よりも國家にとつて一層有利と考へられるのであらうか。勿論小農經營は重要な改良を妨げることが多い。然しこの經營によつて土地の總生產は最も大となり、從つて可及的多くの人口を養ふことが出來る」（註一）と。斯くて彼れは極力小農經營の有利を說いた。後年「經濟學新原理」に於いて主張した家長的小規模生產の思想は既に早くこの「トスカンに於ける農業略圖」の中に示されてゐるのである。

註一　Sismondi, Tableau de l'agriculture toscane, p. 189-90.

斯くてシスモンディの根本思想たる「社會經濟」の理念は「經濟學新原理」の出版以前に既に成形してゐた。「トスカンの農業略圖」に於いて、また「富業的富につゐて」に於いてこれをみることが出來るのである。さうすると、彼れは「經濟學新原理」を著すまで正統學派の使徒であつたとみる通說には大なる修正が加へられねばならぬ。私のみるところでは、シスモンディの根本思想は既に當初から確立されてゐた。そして彼れは偶〻第十九世紀初頭に歐洲を襲つた恐慌に面して、資本制生產に於ける不均衡の理論を「經濟學新原理」において附加したといふのである。この不均衡の理論は既に彼れの「社會經濟」の理念を前提として構成されてゐる。だから彼れは屢〻感情的語調を以て資本制生產の不幸を說くのである。尤も產業革命の途上にあつて生起した恐慌は彼れに非常な衝擊を與へた。そのため彼れはその對策としての社會經濟政策に自信を失墜した。そこで彼れは「經濟學新原理」以後に於いては專ら不均衡の指摘に專念してゐる。それにしても、彼れの主要な關心事はこの事象に對する科學的說明を與へることではなくて、「社會經濟」から出發して、正統學派の樂觀論を打破することであつた。さうすると、彼れの根本思想は遂に一貫された形で當初から流れて來たものとみなければならぬ。

尙ほシスモンディの歷史的方法も夙に其「トンカンに於ける農業略圖」に現れてゐる。彼れは此書の開卷第一頁を次のやうに說き起してゐる。

「自然科學の興味と研究とがヨーロッパに再興しはじめたとき、新哲學者達は初めから理論を把握し、これを體系に歸せようと欲した。彼等は經驗の代りに想像を誇つた。そして彼等は學ばねばならなかつたときに敎へようと努力した。乃ち彼等英才のためにとつたこの進路を放棄し、そして傾聽し、觀察し、經驗し待望するに至るまでは幾分の時間が必要であつた。けれども經驗の時代は遂に來た。吾々を啓蒙すべきものは經驗のみであるといふことが

一般に認められるやうになつた。而して他の科學に於けると等しく、農業に於いてもいまやこの教訓が遵守せられる」（註一）と。

彼れは又「商業的富について」に於いて、經濟學が無味乾燥な計量の上に、また爭ふべからざる眞理として與へられた曖昧な公理から演繹された定理の數學的系列の上に打ち樹てらるべきでない」（註二）と說き、歷史的研究の必要を次のやうに主張してゐる。

「吾々は人間の本性、種々なる時及び場所に於ける社會の狀態と境遇とを知らねばならぬ。吾々は歷史家及び旅行者に諮らねばならぬ。また吾々自身を省みなければならぬ。たゞに諸法律を研究するだけでなく、尙ほこれ等法律が如何に行はれてゐるかを知らねばならぬ。たゞに輕出入の表を調べるだけでなく、國の狀態を知り、家族の內心に這り込み、民衆の苦樂を判斷し、細目の觀察によつて大なる特徵を確かめ、そして絕えず科學を日常の實踐に近づかしめねばならぬ」（註三）と。

シスモンディの理論の偉大なる功績とされる歷史的觀察的方法も亦「トスカンの農業略圖」及び「商業的富について」において旣に現れてゐる。

註一　Sismondi, Tableau de l'agriculture Toscane, p. 1.

註二　Sismondi, De la richesse commerciale, tome I, XIV-XV.

本稿を草するに當つて、高橋誠一郎先生より貴重な文獻を拜借した。厚く御禮申上げる。

名子制度と家畜小作

——小本川流域地方の名子制度（二）——

小池基之

（1）

前述の諸事例に於て旣に明らかな如く、名子制度には名子に對する貸與物件の中には牛馬の含まれてゐる場合があり、又名子關係の附帶條件として冬期間牛馬の舍飼を行はしむる各立牛馬、或ひは利分け、仔分けの形態による立牛、立馬の制度が結び付いてゐる場合がある。名子制度等の如き隷屬小作慣行の一附屬要具として牛馬が給與されてゐる場合は、東北地方に於ける低位なる土地生產力と相俟つて、勞働家畜並びに重要なる自給肥料である厩肥の供給源として必然的に結合してゐたのであつて、特に馬は名子制度の成立過程が莊園成立、支配の時期にあつたのと照應して、地方豪族間の軍裝上の必要から地緣的增殖、保護が講ぜられたものと考へられやう(1)。何れにしてもこれ等の場合は勞働家畜又は種畜として農地に附屬したので、土地所有關係の內容がこの場合の家畜小作の性質を規定する。